報告 591

主体的に問題解決する子どもを育てる探究的な学習（2 年次）

－汎用的な資質・能力と各教科等の資質・能力を育成する学習の在り方－

加藤　俊介（京都市総合教育センター研究課　研究員）

加速度的に変化する社会は，予測困難になってきている。未来の社会をたくましく生き抜くためには，習得した知識・技能を活用し，多様な問題に対処したり解決したりすることができる力が求められる。そのような力を育む探究的な学習の充実を図るため，学習の基盤となる汎用的な資質・能力と各教科等で育成を目指す資質・能力を一体的に育むこと目指し，生きる力の育成の実現を志向し，実践を行った。

第１章　求められる探究的な学習

第１節　探究的な学習が目指す子どもの姿

本研究では，探究的な学習を基礎的な探究と発展的な探究の二つのプロセスから構成している。その学習のプロセスを，図１に示す。

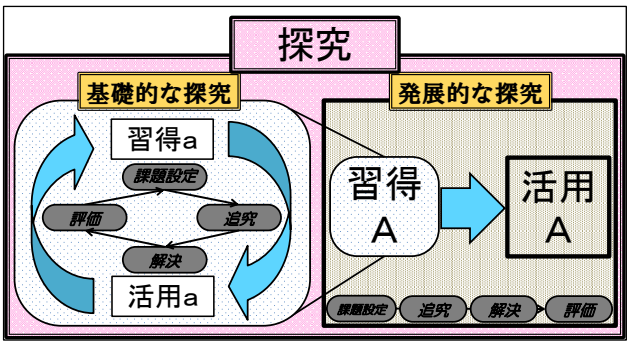

図１　探究的な学習のプロセス

基礎的な探究では１時間の学習で新たな知識や技能を習得する。その習得した知識を活用して思考することで新たな知識や技能を習得することができる。このような習得ａ活用ａのサイクルが単元を通じて繰り返される。基礎的な探究を通じ，単元末には概念や法則等が習得される。それが習得Ａである。発展的な探究では，この習得Ａを活用する場面として活用Ａを設定し，習得した概念等が現実の問題場面で生きて働く知識となることを目指す。

第２節　探究的な学習を通じて育む資質・能力

汎用的な資質・能力と各教科等で育成を目指す資質・能力を育成することで，探究的な学習の充実を図る。本研究では社会科を中心に次の視点からそれぞれの資質・能力の育成を目指す。

＜汎用的な資質・能力＞

ア　対話的な学びの充実

イ　活用する力の育成

＜各教科等で育む資質・能力＞

ア　社会的な見方・考え方を働かせる

イ　問いの設定

以上を踏まえ，本研究の構想図を図２に示す。

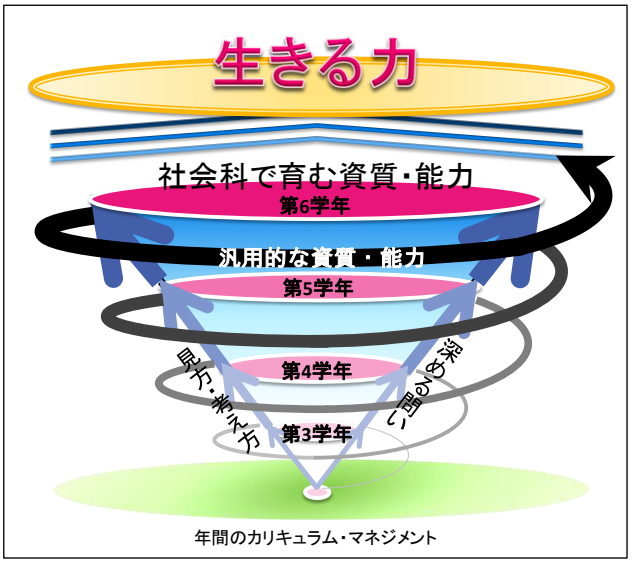

図２　研究構想図

第２章　充実した探究的な学習の実現に向けて

第１節　汎用的な資質・能力の育成を目指して

ア　対話的な学びの充実

対話的な学びの充実を図るため，子どもたちが自分たちの対話の実態を認識することが必要である。そこで，子どもたちの対話の様子を記録し，子どもたち自身が映像と文字で確認できるようにする。また，どのように対話をすることで考えを深めることができるのか，具体的な方法を対話カードとしてモデルを提示し，常に携帯できるようにする。

イ　活用する力の育成に向けて

まず，基礎的な探究を通じ，社会的事象の意味や意義，特色や相互の関連等について理解することを目指す。その上で，発展的な探究の活用Ａの場面で現在の社会に存在する問題について習得Ａを生かして解決策を考えたり，よりよい在り方は何かを判断したりするなどの場面を設定する。

第２節　社会科で育む資質・能力の育成を目指して

ア　社会的な見方・考え方を働かせる

各教科等の見方・考え方を適切に働かせることで資質・能力の育成を図っている。そのためには子どもたちが見方・考え方を適切に働かせるとはどういうことかを理解する必要がある。そこで，見方・考え方シートを配布し，適宜確認できるようにすることで，見方・考え方を適切に働かせることができるようにする。

イ　問いの設定

子どもが見方・考え方を適切に働かせることができるようにするためには教師の適切な問掛けが重要となる。そこで，1 時間の学習における問いの提示場面を次の二段階から構成する。

①主に社会的事象の事実をとらえる場面
例「いつ～しているのだろう」「どんな～だろう」
②主に社会的事象の意味について考える場面
例「なぜ…するのだろう」「どちらがよいのだろう」

第３章　探究的な学習の実際

A 校第４学年, B 校第６学年でそれぞれ 3 単元の実践を行った。

第１節　基礎的な探究の充実

１）　見方・考え方を働かせる学習

子どもたちが実際に見方・考え方を働かせた場面で見方・考え方シートを配布した。この配布シートに示された視点を用いて調べたり考えたりする姿が見られた。さらに，教師が二段階に分けた問いかけをすることにより, 事実を調べる場面か, 意味を考える場面なのかを区別して学習を行うことができ，それぞれの問いに対して適切に見方・考え方を働かせながら考える姿が見られた。

２）　対話的な学習

自分たちの対話の実態を可視化し，さらに対話カードを配布したことで，対話に対する意識が高まった。また，主に社会的事象の意味について考える場面で対話場面を設定したことで，習得した知識を活用しながら考えたことを他者と話合うことができ，互いの考えを深めていった。

第２節　発展的な探究の充実

活用 A の場面を各単元末に設定した。A 校でははじめ，習得 A を自分事としてとらえて考える活用 A の場面を設定したが，習得した概念や知識を適切に活用することができない子どもも多く見られた。B 校では習得 A を基に活用 A では討論を行った。しかし，B 校でもはじめは習得した概念や知識を用いて討論することができず，考えが深まらない子どもがやはり多く見られた。しかし，活用 A の場面を適宜設定していったこと，また，習得 A の考えを適切に用いることができるようにするため，習得 A の学習場面で概念を図式化したり活用 A を見越した取組みをしたりすることを通じ, A 校 B 校のいずれでも活用 A の場面で習得した知識や概念を活用して考えを深める姿が見られ，活用する力の高まりを見ることができた。

第４章　実践の成果と課題

第１節　授業実践を通じて明らかになった姿

実践前後に行った児童質問紙調査の結果を分析した。見方・考え方を働かせる学習，対話的な学習，活用場面の設定について，それぞれの取組により子どもたち自身が実践前よりも充実を実感している結果が見られた。

第２節　活用場面の設定に向けて

限られた時数の中で，発展的な探究の活用 A の場面を設定するため，年間の学習計画を見通し，どの単元で行うのかを考えることが必要となる。

また，図 3 に示すように，1 時間の前段に習得 A を, 後段に活用 A の学習場面を設定することで, 習得した概念等を活用することも可能である。

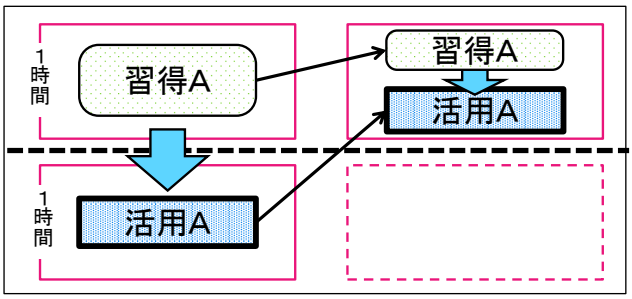

図３　習得 A と活用 A の時間設定の例

第３節　探究的な学習の広がり

担任による学習評価が C 群（下位層）であった子どもたちの実践前後にアンケート結果を比較すると, 実践後の評価が向上した項目が多く見られ, 探究的な学習を通じ，学習の深まりを実感していることが明らかとなった。また，ノートの記述などを分析すると，思考が深まっている様子がうかがえ，探究的な学習の充実を図る取組は，下位層の子どもたちの学力保障にもつながっていった。

さらに，他教科における学習にも，探究的な学習の取組の成果が生きている子どもの姿が見られるようになった。

このように，探究的な学習の充実を目指すことで，生きる力の伸長を期することができる。